

うわべで人をさばかないで

ヨハネの福音書 7章 14-24 節

はじめに

今日の聖書箇所は、「**祭りもすでに半ばになったころ、イエスは宮に上って教え始められた**」という言葉から始まります。この時、「ユダヤ人の祭り」が行われていました。「仮庵の祭り」という秋の祭で、一週間行われます。この祭りは、英語で「キャンピング・フェスティバル」とも訳されることもあるようで、ユダヤ人たちは一週間、木の枝や葉っぱなどで仮小屋を建てて、そこで生活するのです。ユダヤ人たちは遠い昔、モーセを通してエジプトの奴隷状態から解放されて、四十年間、荒野の旅を続けました。その時、ユダヤ人たちは仮小屋で生活したのです。その時のことを覚えるため、その時のことを忘れないために、ユダヤ人たちは一週間、仮小屋で生活するのです。

この「仮庵の祭り」の時期、「宮」、つまり「神殿」があるエルサレムには、多くの人々が各地から集まって来ます。その人ごみの中で、人々の話題となっていたのは、イエス様でした。ユダヤ人の宗教指導者たちは、「あの人はどこにいるのか」と言って、イエス様を捜していました。群衆は、小声で「あの人は良い人だ」とか「あの人は群衆を惑わしている」と噂をしていました。今日の聖書箇所では、イエス様は「**悪霊につかれています**」と言う人までいました。当時の人々にとって、イエス様は何者か、イエス様をどう見るかということが、大きな問題となっていたのです。人々は賛否両論でした。イエス様を支持する人もいれば、支持しない人もいる、支持しないどころか、イエス様を殺そうとする人さえいたのです。

では、私たちはイエス様をどう見るのでしょうか。イエス様は今日の聖書箇所の結論として、こう言われます。「**うわべで人をさばかないで、正しいさばきを行いなさい**」。イエス様はここで、一般論を語っているのではありません。イエス様は私たちに、イエス様ご自身をうわべで判断しないで、正しく判断しなさいと言っておられるのです。

1. イエスの教えは、神から出たものか

イエス様は、「仮庵の祭り」の半ば頃、つまり四日目あたりに、エルサレムの「神殿」で教え始められました。そこには、ユダヤ人の宗教指導者たちや群衆が集まっていた。イエス様の説教を聞いたユダヤ人の宗教指導者たちは、驚いてこう言います。「**この人は学んだこともないのに、どうして学問があるのか**」。

当時、神殿で説教をするような律法学者たちは、有名な学者のもとに弟子入りをして学びました。そこで十分な訓練を受けて一人前となるのです。しかしイエス様は、ついこの間まで、ガリラヤのナザレで大工をしていました（マルコ 6：3）。有名な学者のもとで訓練を

受けた経験ありません。しかしイエス様が語る説教は、有名な学者たちより遥かに権威のあるものだったのです（マルコ 1：22）。そこで、人々は、イエス様の教えはどこから得たのか、イエス様の教えの起源はどこにあるのか、不思議に思ったのです。

そこでイエス様は、こう答えます。「**わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた方のものです**」。イエス様は、自分の教えは、自分のオリジナルでもなく、誰かの学者から学んだものでもなく、神様ご自身から直接教えられたものだと言われるのです。つまりイエス様の教師は、神様ご自身で、イエス様の教えと神様の教えは、全く一致していると言われるのです。

イエス様の教えは、神様からのものか、それともイエス様ご自身が勝手に作り出したものか、これは当時の人々にとって大きな問題でした。神様からのものならば、信じ従わなければなりません。しかしイエス様ご自身が勝手に作り出したものならば、信じ従うわけにはいきません。人々は判断に迷うのです。そこでイエス様は、判断の基準として、二つのことを語ります。一つは 17 節の言葉です。「**だれでも神のみこころを行おうとするなら、その人には、この教えが神から出たものなのか、わたしが自分から語っているのかが分かります**」。神様のみこころを行おうとする人は、イエス様の教えが神様のものかどうか、正しく判断できると言われるのです。ここでは、「神様のみこころを行っている人」とは言われていません。「神様のみこころを行おうとする人」と言われています。その人が、神様のみこころを行えているかどうかは問題ではありません。神様のみこころを行いたいと願っているかどうかの方が大切なことです。神様のみこころを必ずしもいつも行っているわけではないけれど、いつも神様のみこころを行いたい、神様が喜ばれる道を歩みたい、神様と共に歩みたい、そう願っている人は、イエス様の教えが本物かどうかをちゃんと見分けることができると言われるのです。神様のみこころを行うことと、いつも対立するのは、自分のことを行うということではないでしょうか。つまり自分の考え、自分のしたいと思うことに従って生きるということです。いつも人生のあらゆる判断基準が、神様ではなく自分という人には、イエス様の教えが本物かどうかを見分けることができないということではないでしょうか。

もう一つ、イエス様の教えが本物かどうかを見分ける判断基準は、18 節の言葉です。「**自分から語る人は自分の榮譽を求めます。しかし、自分を遣わされた方の榮譽を求め人は真実で、その人には不正がありません**」。つまり、自分の榮譽を求めているか、それとも神様の榮譽を求めているか、ということです。イエス様によれば、自分の榮譽を求めている人は真実ではありません。つまり偽物です。逆に、神様の榮譽を求めている人は真実であり、本物だと言われるのです。「榮譽」という言葉は、「栄光」とも訳される言葉で、もともと「光」を意味する言葉です。つまり誰に光が当たるかが問題なのです。言い換えれば、誰にスポットライトが当たるかが問題なのです。自分にスポットライトが当たり、自分が主役、自分に注目が集まることを求めるのか、それとも神様にスポットライトが当たり、神様が主役、神様に注目が集まることを求めるのか、なのです。イエス様は、自分にスポットライトが当たることを求める人は、真実ではない、偽物だと言われるのです。逆に神様にスポットライトが当た

ることを求める人こそ、真実で本物だと言われるのです。

2. イエスは、安息日を破っているのか

ユダヤ人の宗教指導者たちは、イエス様を殺そうとしました。そのきっかけとなったのは、5章に出てくるイエス様の奇跡です。イエス様が、38年も病気に苦しんでいた人を、安息日に癒したことに腹を立てて、彼らはイエス様を迫害し始めました(ヨハネ5:16)。彼らは、イエス様が安息日にしてはならないことをした、安息日の律法を破ったと考えたからです。それだけでなく、イエス様が神様を父と呼び、ご自分を神様と等しくされたことも、彼らは許せなかったのです(ヨハネ5:18)。確かに、旧約聖書の律法では、安息日を汚す者、安息日に仕事をする者は、殺されなければならないと書かれています(出エジプト記31:14-15)。その律法を根拠に、彼らはイエス様を殺そうと考えていたのかもしれませんが。

しかしイエス様は、今日の聖書箇所、彼らの矛盾を指摘されます。一つは、19節の言葉です。「**モーセはあなたがたに律法を与えただけではありませんか。それなのにあなたがたはだれも律法を守っていません。あなたがたは、なぜわたしを殺そうとするのですか**」。彼らは、安息日の律法、つまり十戒の「第四戒」を根拠に、イエス様を殺そうとします。しかしイエス様によれば、彼らは十戒の「第六戒」の「殺してはならない」を全く守っていないと言われるのです。つまり十戒の第四戒を守ろうとするあまり、第六戒を破っていると言われるのです。

そればかりではありません。もう一つ、「割礼」の問題を取り上げて、イエス様は彼らの安息日の理解に疑問を投げかけます。21-23節です。「**わたしが一つのわざを行い、それで、あなたがたはみな驚いています。モーセはあなたがたに割礼を与えました。それはモーセからではなく、父祖たちから始まったことです。そして、あなたがたは安息日にも人に割礼を施しています。モーセの律法を破らないようにと、人は安息日にも割礼を受けるのに、わたしが安息日に全身を健やかにしたということで、あなたがたはわたしに腹を立てるのですか**」。

「割礼」というのは、ユダヤ人の父祖アブラハムから始まったもので、ユダヤ人の男の子は生まれて八日目に包皮の肉を切り捨てられるのです。これは、神様の民であることの「しるし」でした。そしてその後、モーセを通して、「安息日」の律法が与えられたのです。「安息日」を守ることもまた、神様の民であることの「しるし」でした。安息日には、「仕事をしてはならない」とされていました。イエス様の時代のユダヤ人の宗教指導者たちは、「仕事をしてはならない」と言われている、その「仕事」とは何かを厳密に規定しました。物を運ぶことも「仕事」であり、命に関わらない医療行為をすることも「仕事」でした。その意味で、「**起きて床を取り上げ、歩きなさい**」(ヨハネ5:8)と言って、38年も病気に苦しんでいた人を癒したイエス様は、安息日を破った者とされたのです。

しかしイエス様は、「安息日」に「割礼」は施すではないかと言われるのです。「割礼」は、産まれて八日目に施さなければなりません。子どもが産まれる日を、人間は調整できないので、産まれた日によっては、八日目が「安息日」になってしまうこともあるのです。「割礼」を施せば、包皮の肉を切るのも、当然、割礼後に医療行為もしなければなりません。しかし

「割礼」の医療行為は、「安息日」でも許されていたのです。そうであるならば、イエス様が 38 年も病気に苦しんでいた人を癒したことも、許されるべきではないと言われるのです。「割礼」は、包皮の肉という体の一部を癒す行為です。しかしイエス様は、38 年も病気に苦しんでいた人の全身を癒したのです。「安息日」に体の一部を癒した行為が許されて、なぜ体の全身を癒した行為が許されないのか、とイエス様は言われるのです。

「安息日」とは、何なのでしょう。「安息日」には「仕事をしてはならない」と言われていますが、「仕事をしないこと」が「安息日」の目的なのでしょう。私たちは、もう一歩突っ込んで、「なぜ仕事をしてはならないのか」を問わなければならないと思います。イエス様は、「うわべで人をさばかないで、正しいさばきを行いなさい」と言われました。「安息日」に「仕事をしてはならない」と言われているから、仕事をしなければそれでよいというのは、あまりにも「うわべ」だけの判断、「表面的な」「薄っぺらい」判断と言わざるを得ません。私たちは、「なぜ仕事をしてはならないのか」を問わなければならないのです。イエス様は、「安息日」に人を癒されました。しかも「全身を健やかに」されました。この「全身を」という言葉は、「そっくりそのままを」「一切を」という意味の言葉です。ある人は、この「全身を」という言葉は、「全存在を」と訳してもよい言葉だと言いました。つまりイエス様は、人の体を癒しただけでなく、心も魂も癒されたのだと言うのです。私もそう思います。「安息日」とは、私たちの体が癒される日だけでなく、私たちの心も魂も癒される日なのではないのでしょうか。そのことを、人々に教えるために、また私たちに教えるために、イエス様はあえて「安息日」に人を癒されたのではないのでしょうか。

私たちは、「安息日」に「なぜ仕事をしてはならない」のでしょうか。それは、イエス様によって、全存在を癒していただくためではないのでしょうか。仕事をしないだけならば、体も心も癒されるかもしれませんが、しかし魂は癒やされません。魂は、魂の医者であるイエス様にしか癒せません。「安息日」にイエス様はどこにおられるのでしょうか。それは、教会の「礼拝」です。イエス様が「**二人か三人がわたしの名において集まっているところには、わたしもその中にいるのです**」(マタイ 18:20)と言われたからです。「安息日」は、私たちの全存在が癒される日です。そのために私たちは、仕事を休み、イエス様を礼拝するのです。

しかし私たちは、自分のためだけに「安息日」を守るのでよいのでしょうか。私たちは、他の人が「安息日」の祝福に与れるように、イエス様の癒しに与れるように仕えなければならないのではないのでしょうか。私たちの教会では、日曜日の午後に、教会堂を地域に開き、子ども食堂とオレンジカフェを行っています。日曜日は、奉仕者が集まりやすいという理由もありますが、決してそれだけではありません。イエス様が「安息日」に、弱さを抱えている人に仕えられたように、私たちも地域のあらゆる弱さを抱える人々に仕えるべきだと考えるからです。そして、「安息日」の祝福を一人でも多くの人に与ってほしいと願うからです。「安息日」に、教会堂に足を踏み入れる、そしてイエス様を信じるクリスチャンたちと接する、そのことを通して、「安息日」の祝福の味見ができるのではないかと思います。

私はコストコというスーパーによく行きます。コストコに行く楽しみの一つは、試食が沢

山あることです。この間も、パンの試食があって、そのパンがあまりにも美味しかったので買おうということになりました。試食が美味しければ、本物を買おうと思うのです。子ども食堂やオレンジカフェに来ている地域の人々も、「安息日」の試食をしているようなものです。しかし、もしそれが本当に美味しければ、本物を食べてみたい、礼拝に行ってみたい、イエス様の話を聞いてみたいと思うはずで

す。「安息日」は、私自身と他の人の全存在の癒しのためにあります。そのために、私たちは仕事を休むのです。

おわりに

イエス様は、「うわべで人をさばかないで、正しいさばきを行いなさい」と言われました。私たちは最終的に、イエス様をどう見るのか、どう判断するかを決めなければなりません。イエス様は、単なる「良い人」か、それとも「人々を惑わしている人」か、また「悪霊につかわれている人」か、「律法の違反者」か、それとも神様から遣わされた「神の子」なのか、私たちは判断しなければなりません。しかも「うわべ」で判断するのではなく、よくよく考えて、正しく判断しなければなりません。

私たちは人生の中で、あらゆる選択をし、あらゆる出来事を判断しなければなりません。時には間違っ

た判断、間違っ

た選択もあったことでしょう。しかし、イエス様についての判断だけは、決して間違っ

てはなりません。なぜなら、イエス様をどう見るかの判断は、私たちの永遠の問題だからです。ヨハネは、「**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに世を愛された。それは御子を信じる者が、一人として滅びることなく、永遠のいのちを持つためである**」(ヨハネ 3:16)と言いました。イエス様をどう見るかは、私たちが滅びるか、それとも永遠のいのちを持つかを決定するものです。ですから決して「うわべ」で判断してはならないのです。イエス様は、ご自身こそ神様から遣わされた「神の子」と言われます。ぜひ皆さんには、正しい判断をしていただきたいと思います。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは、ひとり子イエス様をこの世に遣わし、私たちに愛を示されました。しかしイエス様は、人々から「うわべ」で判断され、ついには十字架で殺されました。私たちは、この十字架で殺されたイエス様が、「神の子」であるのか、私たちに「永遠のいのち」を与える救い主であるのかを判断しなければなりません。私たち一人ひとりが正しい判断ができるよう

にお導きください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。